



歯医者さんが教える 歯と口腔の健康管理

〔第7回〕 口腔がんについて①

監修／歯学博士 鹿島 健司

高齢化の進行に伴って、昨今、口腔の悪性腫瘍（口腔がん）によって亡くなる方が急増し、年間5,000人にも上っています。近年話題になっている、子宮頸がんによる年間の死亡者数が3,500人とされているので、その数の多さがお解りいただけるかと思えます。口腔がんは生命の危機に係わるとともに、手術によって顔貌の変化や咀嚼（ものを噛む）・嚥下（飲み込む）・発音などの重要な機能にも障害を及ぼすことも多いため、より早期に発見・治療されなければなりません。



写真1 舌がん（67歳 男性）



写真2 舌がんの手術後



写真3 左下顎歯肉の悪性腫瘍（58歳女性）

口腔がんの中で最も多いのは「舌がん」（写真1）で、次に多いのは歯肉にできる「歯肉がん」（写真3）です。その他、下顎の歯肉と舌の間のできる「口腔底がん」、頬の粘膜にできる「頬粘膜がん」などがあります。

写真1は舌に生じた悪性腫瘍である舌がんです。舌のふち～下面にかけてできることが多く、表面はザラザラしています。写真2はその手術後で、茶色い部分は皮膚移植されたところです。比較的早期に発見されたので、部分的な切除だけで済んだ症例です。

監修／鹿島健司（歯学博士）。1958年1月生。かしま歯科医院院長。川口歯科医師会学術部長 日本大学兼任講師

写真3は左の下顎内側部の歯肉に生じた悪性腫瘍で、白い斑点がみられる部分が腫瘍（がん）の部分です。がんの病変が下顎の骨にまで広く浸潤していたため、写真4、5のように下顎の骨を大きく切除して、金属プレートで固定されました。術後から20年以上経過されましたが、この患者さんは現在でもお元気に過ごされています。



写真4 手術後の口腔内

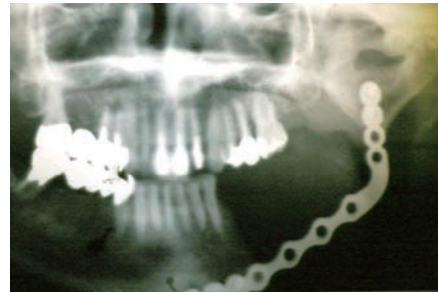


写真5 下顎の骨を大きく切除してプレートで固定



写真6 抜歯後に発見されたがん（74歳女性）



写真7 手術後の口腔内

病変が下顎の骨にまで広く浸潤していたため、写真4、5のように下顎の骨を大きく切除して、金属プレートで固定されました。術後から20年以上経過されましたが、この患者さんは現在でもお元気に過ごされています。

写真6は右下の歯がグラグラしたので抜歯したところ、なかなかキズが治らずに、病理組織検査でがんと診断された症例です。幸い、骨への浸潤はそれほど深く達していなかったため、写真3の方と比べて骨の切除量は少なく済みました。この方も順調に経過されています。

（この項続く）